

## 戦争末期のスマトラ

### 戦後「馬來」の労役

埼玉県 千野 政治

私の生家は水稲、養蚕、麦類を生産していた農業を主としていまして、その家の長男として大正十年五月三十日に生まれました。

昭和十七年一月十日、父母、祖父母、弟一人、妹三人の家族に送られて、東部第三部隊相川隊に入営しました。正式部隊名は近衛第二連隊（現在の武道館）第二機関銃中隊相川隊であります。相川中隊長は陸軍大尉、剣道三段の厳しくも立派な方でありました。私も家で剣道の修業をしていましたので、隊長命で、隊長殿と手合わせをやらせていただいたことを覚えています。

機関銃隊ですから、朝、厩当番として馬の手入れを終え、食事は楽しみなはずだが、初年兵時代は、どの

ようにして食べたか余り記憶にありません。演習整列前の忙しい中、炊事場への食器返納と整列がほとんど同時で、すべて駆け足の連続でありました。一日の日課、訓練が終了すれば直ちに内務班の掃除整頓をしなければなりません。これが終われば日夕点呼の時間になり、整列、作戦要務令、歩兵操典、陸軍礼式令（近衛は特に厳しい）、直属上官の官位、職氏名の暗唱。質問に答えられなければビンタである。点呼が終われば、その場で皇居御座所を拝し奉り、さらに各個遙拜であるが、一日中しごかれた後の一礼にはいつもほろりとさせられた思い出があります。

非常呼集も思い出の一つで、ぐっすり睡眠中、不寝番の「非常」の大声に飛び起き、雑糞、水筒、徒手帯剣、軍靴、巻脚絆などして重機関銃の臂力搬送で宮城外の道路一周が常にありました。

また、近衛師団の各連隊対抗の銃剣術競技会に、中隊代表選手として出場、一本取って中隊舎前に待ち構える中隊長に「勝」の報告をした嬉しい思い出と、中隊の優勝記念写真は今でも懐かしい。

私と第二班の長沼君とは、在スマトラの近衛第二師団、近歩第五連隊直轄高射機関砲中隊に転属を命ぜられ、昭和十九年六月二十九日門司港より乗船、これが生まれ育った故国との最後の別れかと、岸壁を強く踏んで乗船したのは私一人ではなく、幾十万将兵の帰国は白木の箱と覚悟の出発でした。

出港二日目の夜、魔のバシー海峡に差しかかったとき、時間は定かではないが、多分真夜中であつたか、監視より「魚雷発見！」の知らせがあつたと同時、我々の乗船した元南米航路「有馬丸」一万三千トンの船首に魚雷が命中、船が大揺れに揺れたかと思うと、わが船よりも敵潜水艦に対し海中に爆雷三発ほどを投げ込んだ。その爆発振動で船が分解するかと思うほどミシミシと軋む。

我々は甲板で孟宗竹の筏（四メートル角くらいあつたろうか）十枚くらいをロープで組み込んだ上に火砲を乗せました。船が沈んでも火砲だけは残るような計画だったので。砲身を水平以下に下げ、ひたすら魚雷の航跡を狙っていたのです。

その夜は警戒しながら再び台湾北辺まで北上、翌日南下しましたが、魚雷での戦死者は数名と聞きました。戦車、弾薬も大方は海に投げ出されたらしいと聞きました。幸いにシンガポールに上陸したが、台湾高雄港で応急修理した鉄板は荒波によりどこかへ落ちてしまい、船は攻撃されたときと同じ船体でありました。我々はスマトラ島メダン周辺の守備につくべく、ジョホールバル水道を北上、クアラルンプールの西岸より小汽船でメダンに向け出発しました。

メダン上陸、無事、近歩第五連隊、当時の「宮第三八〇四部隊」直轄の中立大尉の率いる高射機関砲中隊に着任し、シャルタル、ベラワン、カバンシヤへ、さらに西海岸各地に布陣、転戦すべく任務に就きました。夜間になると大きな蚊に悩まされながら急遽、陣地の構築の連続でした。うだるような灼熱のスマトラの対空監視勤務には神経をすり減らしました。時にはスパイ検挙のための模擬空襲警報も出された。そうとは知らず急いで陣地につきますと、模擬空襲だったので。

後に分かったのですが、駐屯部隊の四方より信号弾が上がり、十字に交叉した地点が部隊所在地でした。そのときは憲兵が張り込んでいて、ことごとく検挙したようでしたが、このような手法は一度のみで、その後はやらなかったのです。

近衛第二師団の編成は次のごとくでありました。

師団司令部 宮第三八〇〇部隊

近衛歩兵第三連隊、同・第四連隊、同・第五連隊、

近衛搜索連隊、近衛野砲第二連隊、

同工兵第二連隊、近衛第二師団通信隊、

近衛輜重兵第二連隊、近衛第二師団兵器勤務隊、

同衛生隊、同第一野戦病院、

同第四野戦病院、同海上輸送隊、

さらにスマトラには南方燃料廠関係の石油関連部隊が駐在しており、日本の命脈である石油を守る、パレンバン防衛司令部があります。そのため近歩第五連隊直轄高射機関砲中隊はその防衛の一環であるといえます。

パレンバン防衛司令部 富第一〇三六六

高射砲第一〇二連隊、高射砲第一〇三連隊、

機関砲第一〇一大隊、第一〇一一要地気球隊、

パレンバン防衛通信隊、同警備隊、

特設第五八機関砲隊、同第六〇機関砲隊、

同第六一機関砲隊、

パンカランプランダン防衛司令部

機関砲第一〇二大隊、高射砲第一〇四連隊、

南スマトラ燃料工廠、中スマトラ燃料工廠

北スマトラ燃料工廠、

高射砲第一〇一連隊、同第一〇三連隊第七中隊、

機関砲第一〇二大隊第一中隊、

燃料廠関係部関係等の軍属が現地召集され、我々部隊に入隊され、その中には任官待遇の方も入っていました。その人たちの教育のため教官一名と私が助教としてその勤務を命ぜられました。そのため、作戦要務令の勉強の仕直しから火砲の操作、弾装填実などの教育をしました。火砲の弾丸は一分間に六〇発射撃され

るので、そのため三〇秒に六〇発の弾倉填実ができれば実戦の役に立たないのです。このためには練習用の弾丸で昼夜を分かたず装填練習に励みました。

一発ずつではどうしても三〇秒は切れない。そこで、ついに二発ずつ握り込み、はじめて二七秒で装填できるようになり、皆で歓声を上げたのを覚えています。軍隊という所は、やらねばならぬことは必ずやる、という所であり、そのためには上下にかかわらず一体となって達成させなければなりません。人と人との心のきずな、お互いをいつくしみ合い、また時には厳しくする。今は、戦友会で会うとおっかなかったという人もいますが、何もかも忘れて仲良く、四方山話を尽きることをなくしています。

戦地では申すまでもなく輸送班で使うのは日産のトラック。それも数台の運搬車です。従って、内地出発前より命令で、鞍用馬を現地で確保せよというのです。我が中隊の移動のために連隊経理室から鞍馬十頭ほど手配されることとなりました。その次期が初年兵教育

終了とほぼ同時でしたので、師団の蹄鉄工修業教育派遣として私ら二人が選ばれました。

三カ月間の教育終了と、装蹄等を含めた教育が済んだのと終戦の御詔書が発せられたのが同時でありました。

今まで張り詰めていた弓の弦が切れ切れになつてしまい、落胆の極に達し、歩行すら困難となつたのです。どこで一命を落としてもへいちゃらだつたのですが、こんどは気を取りなおした時点から普通の人間に戻り、以前とは逆に恐ろしくなつたのを覚えています。詔勅となれば、特に近衛兵たる私たちの心の動揺はかくし切れないものであります。

中隊に帰り、中隊長殿に無事蹄鉄工終了の報告をし、第一分隊の内務班に戻っても、私を含めて戦友たちも落ち着かず、私物の整理整頓などしている始末でした。

二日ほどたって連隊長沢村俊輔閣下（大佐でなく少将閣下となつていた）の訓示が次のようにありました。

『諸氏よ、誠に御苦労であつた。畏くも天皇陛下の詔勅のとおり堪え難きを堪えて、短気を起こさず戦友

仲良く全員復員船来たらば故国に帰るように……」

とのことでしたので、一同静寂に受け止めたのは、昨日の出来事のようにです。連隊長閣下のその後の消息は知る由もありません。

火砲や小銃を手入れして員数を確かめ連合軍に渡し、丸腰でシンガポールの飛行場の一角で点呼を取らされました。そのとき、鉄道連隊の方々は「自分たちは戦犯容疑者として日本に帰れそうにない」と言っていて、我々に出身県名を言っているのは同県の方を尋ね回っておりまして。「印緬国境、印緬死の鉄道敷設」など、今まで新聞などで見たことはあったのですが、そのときは鉄道隊の人はどうなるか、「広島県出身者は」「兵庫県の人は」とのことでしたが、私は埼玉県出身者でしたので、ただ漠然と聞いておりました。

昨年「平和の礎 V号」にある「今も心に赤い夕陽の満州」筆者岩城秀夫様（兵庫県）の文中、実の弟様ではないかと；最近、戦友たちに話をしますと、「あの方たちは鉄道隊の方々に、一生懸命お国のため、鉄道施設工事のための任務を遂行した結果、C級戦犯者

として内地へ帰還できないらしいとのこと、あのシンガポール飛行場跡で、我々帰還者に遺言、伝言を依頼し、内地の父母、妻子、兄弟などへ渡してもらいたかったのだ」と。戦後五十年経って、この話を聞いたとき、茫然と絶句し、やるせない気持ちでいっぱいでした。高位高官の者ならいざしらずです。

戦争というのは人の殺し合いだ。非道も何もない。食うか食われるか、生か死かどちらかである。以前がダルカナルの激戦のTVを見ました。米兵の撃つ弾丸に突撃して行った同胞兵が、見る見る倒れてゆく。他人事でない。我々と同じ日本兵だ。何とも見るに忍びない思いでした。二度と戦争をしてはならない。大楠公の詩の中に「誤って干戈の世に生まれ」という句がある。

抑留中の労役は、ブキテマ高地にある連合軍兵士墓地整備作業をしました。我々はジョホール水道を渡り、マレー半島東海岸沿いのエンダオ作業隊として野猿の鳴き声や、虎の吠えるのを聞きながら密林を切り開く作業をさせられました。青枝の葉から落ちてくる戦闘

蟻にはつくづく閉口しました。赤い大きな蟻で、私たちの着ている襦袢では上から食い付かれ、毒はないが何とも痛い。寒気がするほど恐ろしかったのを覚えています。

堀の水は赤茶けた水で、飯ごうで沸騰させて飲みましたが、内地の清らかな水がいつも恋しかったものです。人跡未踏の密林での作業にも入ったのですが、左右に倒れ朽ちた古木に苔や、しだ類が生えて、どこが地面か分からない。倒木らしい間に落ちると体が見えなくなってしまう、やっとはい上がる始末です。

作業は伐採で一カ月も過ぎたであろうころの、風の静かな日を選んで赤白く乾いた木に点火すると、実によく燃える。伐採した所が大体燃え切るには十日ほどかかりました。また、山に入って驚いたことは、大木の切り口が地上から三メートルも上にあります。あんな高い所を切ったのか、しかも、直径一メートルもあります。地面の所は飛行機のような形になっています。焼けつくような暑さの中での耕作や、残木片付け作業の休み時は、その切り株が日陰を作って都

合がよかったものです。

私たちの身なりといえば、襦袢と蚊帳の裾を切った作った青い禪だけ、それに軍靴を履いています。弁当は重湯のような粥。それも野草入りのほとんど水粥です。十一時ごろになると我慢ができません、全員がこれを食べてしまう。夕方五時ごろ、腹を空かして宿舎に帰って来るのですが、楽しいというほどの食物はない。米は一人前に、昔の小さい燕印のマッチ小箱にすり切り一杯と、炊事班長は説明しました。そのため、一生懸命野草を採って茹でこぼし、炊き混ぜて量を増やすのだそうです。大便所は青い草の色で蛆虫もわからない。我々はよく生きてこられたものであります。

数年前、テレビ番組で門司の岸壁が、くっきりと写し出されました。大きな汽船が横付けされていました。私は朝食中だったのですが、戦場に赴くとき、これが日本の土とお別れだ、後は白木の箱で帰るのかと、当時の思い出のため、ほろほろと止めどなく涙が流れ落ちました。妻に「どうしたの」と問われましたが、答えても理解してもらえないかどうか疑わしかったのです

が話をしました。正確な思いやりのある受け止め方ではなかったような気がしました。

私は終戦二年後の昭和二十二年七月十六日、故郷に復員しました。戦地へ行った時の輸送船では任地まで約一カ月かかったのです。それは魚雷を避けるため船が蛇行していったからでしょうが、帰りはたった十一日間で佐世保港に着きました。

こうして半世紀も過ぎても当時のことを述べ記せることは有り難くもあり、生と死の間を彷徨い、忘れようとしても忘却することはできない心の傷が哀れです。

私たち「埼玉是空会」四〇〇人の会員は、秩父三十四番さんのご宝前の大香炉の屋根の下に全員の名があります。四国へ行くと飛行隊殉難の方々の不動明王が祀ってあります。同じ国難に赴いた仲間として合掌してきました。

我々は戦没者の御冥福を祈り、体の続く限り慰霊のため志を立て、二十年間霊場詣りをいたしています。私たちは堂々と日章旗を立て、日本人らしく胸を張っ

て生きようではありませんか。「人老いるを怖れず、ただ心の老いるを怖る」と我が師は仰せられた。観世音菩薩に護られ、秩父、坂東、西国、四国、そして四国はお礼参りと二回詣らせていただきました。誠に有り難い限りで、私なりに一生懸命神仏におすがりしながら強い信念で、老後を楽しく、平和な日本を楽しく生きさせていただけこうと思っております。

### 玉碎の島サイパン

帰ってきた英霊

岐阜県 長瀬 一郎

幾たびか 戦友を呼べども 答えなく

只潮騒の音が悲しき

国のため 遠き南のサイパンに

玉と碎けし 御霊安かれ

この和歌は、私がサイパンを訪れた慰霊祭で詠んだものです。